



TITLE:

京大広報 No. 415

AUTHOR(S):

京都大学広報委員会

CITATION:

京都大学広報委員会. 京大広報 No. 415. 京大広報 1991, 415: 163-170

ISSUE DATE:

1991-10-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/209250>

RIGHT:

ファイル中には未許諾による非表示部あり.

京大広報

No. 415

京都大学広報委員会



櫓 扇（鎌倉時代 重要文化財）

春日行幸の式次第を扉に記し、手控えに用いたもの。—関連記事本文165ページ—

目 次

<大学の動き>

- 京都大学構内交通規制要項の全部改正…………… 164
- 部局長の交替等…………… 164
- 平成3年度文学部博物館
秋季企画展の開催…………… 165

<紹介>

- 理学部生物物理学教室「大学院最先端設備；
生体情報解析システム装置」…………… 166

<保健コーナー>

- 理解したい漢方薬…………… 167

- 計 報…………… 168

<随想>

国際学会と政治

名誉教授 明石 一…………… 169

<コラム>

ひろい読み

教養部教授 高橋 三郎…………… 170

写真集企画委員会からのお願い…………… 170

＜大学の動き＞

京都大学構内交通規制要項の全部改正

本学構内における交通規制に関する規定を全面的に整備し、安全の確保、騒音の防止等の環境保全及び緊急車両の進入路の確保を図るため、同要項（昭和54年12月4日総長裁定）が次のとおり改正され、平成3年10月1日から適用されることになった。

京都大学構内交通規制要項

（趣旨）

第一 この要項は、京都大学構内（別表に掲げるものに限る。以下「構内」という。）における緊急車両の進入路の確保、環境保全、騒音の防止等を図るため、自動車（道路運送車両法（昭和26年法律第185号）第2条第2項に規定する自動車及び同条第3項に規定する原動機付自転車をいう。以下同じ。）の交通に関し必要な事項を定めるものとする。

（入構の許可）

第二 自動車を運転して入構しようとする者は、当該構内に所在する関係部局の長（医療技術短期大学部にあっては、部長。以下同じ。）の定めるところに従い、その許可を受けなければならない。

（遵守事項）

第三 構内において自動車を運転する者は、次の各号に掲げる事項を遵守しなければならない。

- (1) 所定の駐車場以外の場所に駐車しないこと。
- (2) 本学の行事、緊急事態の発生等のため、本学が臨時に規制を行うときは、これに従うこと。
- (3) 構内を自動車の保管場所として使用しないこと。
- (4) 構内に設置した道路標識及び道路標示に従うこと。
- (5) その他当該構内に所在する関係部局の長の定める

ところに従うこと。

- 2 前項各号に規定するもののほか、構内における交通の安全、危険の防止等に関し必要な事項については、道路交通関係法令の規定の例による。

（違反者に対する措置）

第四 この要項に違反した者に対しては、当該構内に所在する関係部局の長は、その態様により適宜の措置を講ずるものとする。

（その他）

第五 この要項に定めるもののほか、この要項の実施に関し必要な事項は、構内の実状に即して、当該構内に所在する部局の長が定める。

附 則

- 1 この要項は、平成3年10月1日から実施する。
- 2 この要項実施後第五に基づく定めがなされるまでの間、当該構内にあっては、なお従前の例による。

別表

本部構内
北部構内
教養部構内
医学部・病院構内
薬学部構内
東南アジア研究センター構内
人文科学研究所構内

部 局 長 の 交 替 等

人間・環境学研究科長

竹市明弘人間・環境学研究科教授（人間・環境学専攻人間存在基礎論講座担当）が10月1日人間・環境学研究科長に任命された。任期は平成5年9月30日までである。

平成3年度 文学部博物館 秋季企画展の開催

本学文学部博物館では、下記のとおり秋季企画展「公家と儀式」を開催いたします。本学の教職員・学生は無料です（身分証明書を呈示）。

記

期 間 10月22日（火）～ 12月7日（土）

ただし、一般公開に先立ち、本学教職員・学生には21日（月）に特別に公開しますので、多数ご観覧ください。

開館時間 月曜日～金曜日 9:30～16:30
土曜日 9:30～12:00

（入館は閉館30分前まで・日祝日は休館）

場 所 博物館 企画・総合展示室（1F・2F）

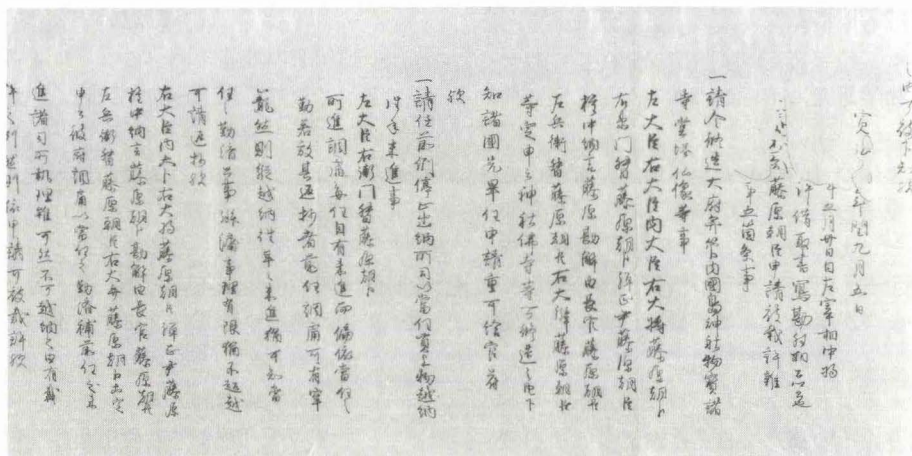
展示内容

企画展「公家と儀式」

今回の企画展示は、「公家と儀式」をテーマに、四つの小テーマを設けました。「王朝の儀式と政務」では平安時代の朝廷儀式や太政官政治において作成・使用された古文書を、「公家社会の構造」では儀式を支えた人的・経済的な基盤をあらわす古文書を展示します。また、「勅修寺家の千年」では勅修寺家に伝来した記録類から公家の政治や生活の変遷を追究し、さらに「李氏朝鮮の宮廷」で隣国の宮廷儀式図や装束を展示して日本との比較を行います。展示史料は基本的に文学部博物館所蔵のものとし、足らざる点を他機関の史料で補いました。

近年、平安時代史研究では古記録・儀式書の検討が進み、政治史が新たな展開を見せています。また中世・近世史研究においても、公家や朝廷儀式の果たした独自の役割が注目されはじめています。今回これら最先端の研究成果を生かした展示を企画いたしました。

なお、1階総合展示室では考古常設展示「日本古代文化の展開と東アジア」を行っています。



諸国条事定文（1005年 写）

藤原道長が主宰した公卿会議の議事録

< 紹 介 >

理学部生物物理学教室「大学院最先端
設備：生体情報解析システム装置」

本装置は、昭和62年度に始まった大学院最先端設備費として、生物物理学専攻から要求したもので、好運にも当大学で最初に選ばれ、63年3月に生物物理学教室に設置された。

分子生物学的な手法を用いた生命現象の解明が近年飛躍的に進展し、次々にこれらの生命現象を説明する新しい概念が導入され、それらの現象を担う物質が同定されてきた。このような生物学の

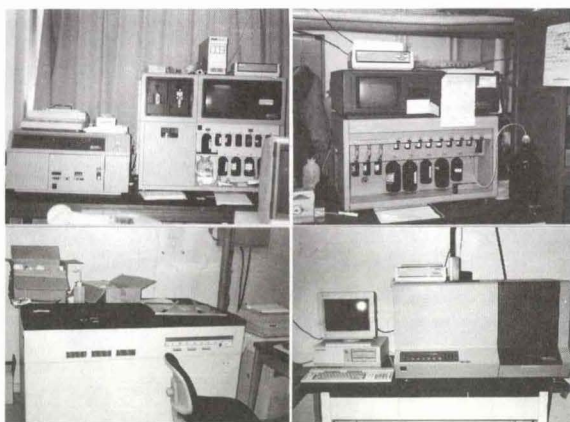
進歩に参画するためには、分子生物学の“三種の神器”とも言うべき機器、DNAシンセサイザー、ペプチドシンセサイザー、DNAシーケンサー、プロテインシーケンサーが不可欠である。これらにバイオイメーリアナライザー、フーリエ変換赤外分光装置及び超遠心機を統合したものが生体情報解析システム装置である。

はじめの4機種は、学内から応募された生物系の専攻が全て購入機器として挙げていたものである。この事はいかにこれらの機器が生物学研究に不可欠であるかを如実に物語っている。

この装置全体の目的である生体情報の解析は、多くの生物現象を担う実体が核酸・タンパク質であることから、主に核酸・タンパク質の機能と構造解析に帰する。近年これらの情報担体の精製や構造解析の技術が進歩し、ごく微量のタンパク質であっても、これらの装置を用いてその構造解析が容易に行えるようになった。特に、遺伝子が容易に手に入り、その構造を自由に変えて、その変異遺伝子を細胞に導入し、それらの機能を調べられるようになったことは、あらゆる生物学の研究において、分子生物学的手法が有効であることを

証明している。

生化学的手法を用いて精製された微量のタンパク質のアミノ酸一次構造は、プロテインシーケンサーを用いて決定できる。アミノ酸配列の決定は、以前は、専門家以外には不可能であったが、当装置を使用することによって、全く専門外の院生にも手軽に使用できるようになった。こうして決定されたアミノ酸配列に基づいて、ペプチドシンセサイザーで大量にペプチドを合成し、これを兎などに免疫して元のタンパク質に対する抗体を得ることができる。得られた抗体を用いて、免疫学的な手法を細胞生物学の研究に応用することができる。

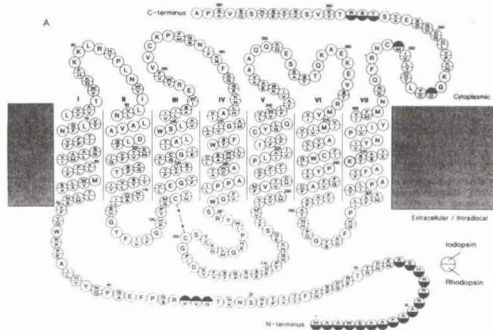


理学部生物物理学教室に設置された生体情報解析システム装置

分子生物学の三種の神器とバイオイメーリアナライザー。プロテインシーケンサー(左上)、DNAシンセサイザー(右上)、バイオイメーリアナライザー(左下)、DNAシーケンサー(右下)

一方、これらの抗体やアミノ酸配列に対応するオリゴヌクレオチドプローブを用いて、遺伝子ライブラリーから目的とする遺伝子をスクリーニングすることができる。得られた遺伝子の塩基配列は、DNAシーケンサーで容易に決定できる。遺伝子のどの領域が生命現象にとって重要であるかは、DNAシンセサイザーを用いて元の遺伝子の塩基配列を置換した変異遺伝子を合成して、こ

れらの遺伝子の機能を調べることによって検討することができる。以上の研究過程、すなわち遺伝子のスクリーニング、サザンブロット、ノザンブロットなどの分子生物学の基礎的技術やS1マッピング、プライマー伸長法、in vitro スプライシング等のより専門化した核酸技術において、放射性同位元素の使用は不可欠であり、これらを迅速かつ正確に検出することは研究を進めていく上で非常に重要である。この点で、バイオイメーリアナライザーが当教室に導入されたことは、画期的なことであった。今までの検出法に比べて、放射線に対する感度が50~100倍近く高まり、一夜の操作が必要であったものが20~30分で結果が手にはいり、研究が大幅に促進されるようになった。



ニワトリのアイオドブシンの一次構造

さらに、長期の操作が必要であり、従来は実験ベースにのらなかった研究が可能となった。この装置は植物学、動物学や化学教室の研究者にも自由に利用されており、理学部における生物学研究に大きな役割を果たしている。

(理学部)

保健コーナー

理解したい漢方薬

病気を如何に克服するか、特に痛みの軽減、更に元気回復、不老長寿などは、人間の切なる願いであろう。

現在の発達した西洋医学では、検査による診断が中心であり、治療は困難なものも多い。

最近、話題になることが多い東洋医学には、何か神秘的な要素もあるようだが、かなわぬ時の神だのみとはいわないまでも、一寸、試してみようという気にさせる部分がある。

東洋と西洋では、医の取り組み方に差がある。永年の経験と、病人の訴えをもとに、疾病を観察して、治療をして来た東洋医学と、科学的手法を重視して、診断と治療をして来たものとの相異であろうか。感染症治療や、各種手術による疾病の治療は、西洋医学の独壇場のようなだが、慢性疾患或いは、原因不明の疾病については、東洋医学による治療も満更ではないらしい。

薬剤師は、生薬学を必修科目として勉強しているが、漢方薬の作用機序などについては、簡単に説明することは困難である。医師といえども、植物・動物・鉱物を材料とする多くの(約2,000種)ものを、縦横に駆使するのは難しい。

漢方治療にやや近い民間療法、又は呪術的の一方通行療法に至っては、全く不明なものが多い。

漢方には、陰と陽、虚と実、方と証など馴じみの薄い用語がある。何れも漢方医が、患者を診断する時の用語である。このような考え方のもとで取り扱われるのが、各種の漢方薬である。

漢方薬は副作用がなく、安全無比のようにいわれているが、そうとばかり断定しないほうがよい。最近話題になったトリカブトに由来する猛毒は、烏頭^{うず}という名でしばしば使用されている。正月の「トソ」の中にも使用されている貴重な薬草である。

本来、漢方薬は、原料植物を乾燥して使用されるものが最も多い。しかし、中には若干加工されるものもあり、それぞれ、漢方医の処方により、水に入れて加熱し、煎じ薬とするか、熱水に浸し、浸剤として使用する場合もある。

たとえば、有名な漢方の煎じ薬である小柴胡湯^{シヨウサイコトウ}は、柴胡^{サイコ} 7gr、半夏^{ハンゲ}、黄芩^{オウゴン}、大棗^{タイソウ}各 5gr、人參^{ニンジン} 3gr、甘草^{カンゾウ} 2gr、乾生薑^{カンシヨウキョウ} 1gr を1日量として、約600mlの水に混じ、約半量になるまで煮つめ、布で濾して服用する。これが基本処方であるが、個々の病態の変化に応じて処方の変更が考えられる。いわゆる匙加減で、加減方と呼ばれている。

正しい漢方的診断を無視して、慢性肝炎には小柴胡湯が有効であるという一般的理由で服用し続けていると、効かないばかりでなく、食欲不振その他の副作用に悩むことがある。自己流に、素人判断で、漢方薬は安全だと決めないでほしい。正しい処方を、正しい調査と正しい使い方で服用して、はじめて有効となるのである。

漢方治療は、数千年の歴史と経験をもちながら、その科学的解明は、今、緒についたばかりである。現代医療と、如何にかかわりあうか。その成果を期待したい。

(保健診療所 木村泰子)

計 報

南井 良一郎 防災研究所教授

本学防災研究所教授 南井 良一郎 先生は、9月15日逝去された。享年60。

先生は、昭和28年3月京都大学工学部建築学科卒業、昭和33年3月同大学院工学研究科博士課程を単位修得退学後、京都大学工学部助手、同防災研究所助教授を経て、昭和41年4月同教授に就任、地盤震害研究部門を担当された。

この間、本学及び他国公立大学において、研究・教育指導に当たり、多数の有能な人材を育成された。また、防災研究所の将来計画検討委員会委員長、資料センター主任などを歴任、所内研究体制の発展に尽力された。

先生の専門分野は建築構造学、耐震工学であり、構造物の非定常非線形地震応答解析、地盤一構造物の非線形動的相互作用、確率論的地震応答解析などの独創的な研究で学会の指導的役割を果たされ、昭和43年度日本建築学会賞を受賞された。主要な著書に『地震工学における確率論的アプローチ』（英文）などがある。

先生は、日本建築学会監事、評議員、振動運営委員会委員、耐震構造研究部会主査などを歴任され、学会活動に貢献された。国際的には、日米科学協力セミナーの代表者、専門誌の編集委員として活躍された。

ここに謹んで哀悼の意を表します。

(防災研究所)

山岡 亮一 名誉教授

本学名誉教授 山岡 亮一 先生は、9月21日逝去された。享年82。

先生は、昭和9年京都帝国大学経済学部を卒業後、大学院を経て、同11年京都帝国大学経済学部

講師となり、2度にわたる兵役後、同大学に復帰し、同21年同大学助教授、同24年京都大学教授に就任。その後、京都大学評議員、学生部長、経済学部部長等を歴任して、京都大学の管理運営に貢献され、同47年4月京都大学名誉教授の称号を授与された。

本学在職の最終年度昭和46年8月には高知大学学長に就任し（同46年9月から同47年3月までは京都大学経済学部教授を併任）、同56年8月までの10年間高知大学の発展に貢献された。この間、高知医科大学の創設にも参画、創設準備委員長として同大学の設置に努力し、設置後は高知医科大学参与として、同大学の管理・運営に尽力された。

先生の専門は、農業経済学で、本領域で数多くの優れた研究業績を残されたが、小農経済理論の独自の道を開拓した功績はとくに顕著である。地代論や土地所有論等の研究に本格的に取り組み、小経営の生産様式の生成・発展・消滅の過程を世界史的観点から追求して、過渡的地代形態の位置づけを明確にするとともに、資本主義における主要な農業問題を小農問題として把握するという独自の立場を確立し、主著『農業経済理論の研究』として結実した。いまひとつの大きな研究分野は、戦後日本農業の実証的研究である。日本農業史上に画期的な意義をもつ農地改革の研究を手がけ、『大阪府農地改革史』編纂で中心的役割を果たされた。その後も、実態調査を通じて農村の現実から虚心に学び、自己の理論を検証していく立場を堅持し、先生が中心になって20余回にわたる農村調査を全国各地で実施した。こうした調査結果を踏まえて、農林業問題の研究で学界に一石を投じたのが、『現代農業問題入門』（共著）及び『林業労働の研究』（共著）である。

これらの研究業績、学術上の貢献にたいして、昭和56年に勲二等旭日重光章を授与された。

ここに謹んで哀悼の意を表します。

(経済学部)

